

論文の和文要旨	
論文題目	アラビア語における 限定・非限定の意味と機能
氏名	榮谷 温子

1 本論文の目的

本論文の目的は、限定と非限定の意味・機能を、主にアラビア語について明らかにすることである。その際、実際の用例、できる限り自然なテキストの分析を重視することを第一の目標とした。できるだけ異なる種類のテキストに目を配り、また書かれたテキストだけでなく話されたテキスト、特に正則語だけでなく方言で話されたテキストにも、時間と能力の許す限り当たった。小説・童話のような文学作品、新聞記事などのほか、話されたテキストについては、録音テープだけでなく、文字におこされたものや方言による漫画なども活用する。方言のテキストとしては、ネイティブ・スピーカーの間で交わされる会話や小断のほか、外国人に対する民俗誌の説明のような特殊な状況での語りも対象として取り入れた。

より多くのアラビア語方言を分析するのが理想だが、筆者の習得したアラビア語にはもちろん限界があり、対象はおおよそ以下に挙げる数種類である：1) 正則アラビア語 2) エジプト方言 3) マルタ語 4) プハラ方言 5) モロッコ方言 6) その他

また限定・非限定という枠組みを、意味・機能に関わる情報構造として捉え、あるメッセージを伝達するのに、限定・非限定という構造がどのような役割を果たすのか、テキスト全体の文脈をも視野に入れた分析を行った。

前後の文脈の欠けた単一の文例を作例して検討している限りでは、例えば、テキスト全体のテーマと限定・非限定の関わりとか、物語のストーリー展開と名詞句の用いられ方の関係などを考察することはできない。本論文では、メッセージの伝達に限定・非限定という構造が果たす役割を、テキスト全体の文脈を考慮に入れることで明らかにした。

2 本論文の構成

本論文は序、第一章から第六章、終章、および付録から成り立っている。その構成は、あらまし次のとおりである：まず、序においては、本論文の目的および手順などについての説明を行った。続く第一章から第六章では、アラビア語の限定・非限定を形式・意味・機能の各面から論じた。最後に付録として、本論に関連する説明や図表などを、末尾にまとめた。

《第一章》

1) 名詞句の限定と非限定との、実際の言語での区別について概観した。限定・非限定という区別は名詞句についての概念だが、名詞句そのものの形式（具体的には例えば定冠詞の有無など）のみに関わるのではないことを明確にし、次いで、ある対象を限定的な名詞句で表すか非限定的な名詞句で表すかを決定する因子を、先行研究を踏まえ整理し、親密性と包含性という因子、さらにそれらの絡み合った同定可能性という概念を紹介した。

- ①話し手と聞き手の間に共有された先行する談話、
- ②発話の瞬間の可視的状況、
- ③一般的知識に関わる、その場限りでない、より大きな状況、
- ④対象の連携を示す照応

以上4つの条件により話し手と聞き手とに「共有されたセット」が形成される。そして任意の指示対象が共有されたセット内に位置しているという認識により、その対象への親密性が引き起こされる。

2) また、情報構造という観点から、限定・非限定という構造と他の情報構造との相違を探り、実際のメッセージ伝達の枠組みの中で、限定・非限定の他の構造との関連と独自性を明確にした。

例えば、情報の新旧はある程度客観的な基準で判断できる構造だが、限定・非限定は話し手や書き手の側の仮定によった主観的な構造である。

テーマ・レーマがある情報を伝達する際の、文レベルでの戦略であるのに対し、限定・非限定は文中の名詞句の指示対象・意味するものに対する、話し手や書き手の側の見解を表す手だてである。

対比の構造は、有限個の候補の中から正しい選択肢を提示するものであり、それぞれの候補の例えば定性などは、対比の構造において副次的な要素でしかない。

指示性について言えば、非指示的つまり世界に指示対象を持たない名詞句であっても、それによって表された属性などが聞き手・読み手に馴染まれたものであれば、限定形となる。親密性という概念は、名詞句の、世界に存在する指示対象に対してだけでなく、その名詞句によって意味されたものの全てに適応できる概念なのである。

3) さらに実際の談話のなかで、限定・非限定の名詞句の諸形式はどのように用いられ使い分けられるかについて、談話に登場する人物・事物のトピック化（例えば登場人物を指示するのに、通常はまず非限定名詞句で導入、限定名詞句でそれを受け、トピック化された後には、代名詞などで指示され続けていく）や、発話の際の視点の置き方に関する先行研究や、名詞句の定性に関する階層・順列を紹介した。

《第二章》

第一章で扱った先行研究で限定・非限定の説明に用いられてきた例文に相当する表現を、インフォーマントにアラビア語で提示してもらい、従来言われてきた親密性・同定可能性、包含性・除外性といった概念が、アラビア語の限定辞の用法にも当てはまるのかどうかについて、考察した。

- 1) アラビア語にも、先行研究で明らかにされてきた親密性、同定可能性、包含性といった基準がほぼ適用できるが、方言間での食い違いも見られた。

例えば「男 (def) は私たちの家の前を車で走った」という文で、エジプト方言では、もし「車」を非限定形で表現すると、その「男」に関するテキストの送り手と受け手とに共有されたセットから車が除外されていることを殊更に示すことになり、例えばその男が私たちに嫌がらせをするために、どこかから借りてきた新しい車、親密性の薄い車のようなことになってしまう。

ところがマルタ語では逆に、「車」を限定形で表現しても共有されたセットにどう組み込まれるのか了解されない。こうしたことから、共有されたセットという概念は共通して存在するものの、その形成には方言差のあることが伺われた。

- 2) 抽象的な方向に拡張された概念は、アラビア語では限定辞を伴う名詞句の形で表されるが、マルタ語には、null形と見なすのが適切ではないかと思われる名詞句の例もあった。
- 3) しかし、従来の研究で同定可能性や包含性という基準が、限定・非限定の決定因子として挙げられて来て、また本論文でも作例が主の前後の文脈のない例文を検討していた限りでは、特にそれ以外の新しい因子を見いだすにはいたらなかった。

《第三章》

アラビア語の限定名詞句を、限定辞を伴う普通名詞、固有名詞、人称代名詞、指示代名詞、関係代名詞の各範疇毎に検討した。また第一章で扱ったいくつかの名詞句の階層なども考慮の内に置きながら、アラビア語の名詞句の限定の度合いの階層について、古典文法の視点を踏まえながら考察した。

- 1) ①代名詞 ②固有名詞 ③指示詞 ④関係詞 ⑤限定辞 al-をとともなう名詞 ⑥以上五種類の限定名詞句を付加された名詞 という限定名詞句の定性の度合いは、古典文法学で主に名詞句の修飾関係という形式上の基準から決定されたものであるが、認知の観点からも十分支持され得るランク付けである。
- 2) さらに Khan (1984) の「個別性の階層」を取り上げ、周辺言語（トルコ語やイラン諸語）の影響で限定辞の失われたブハラ方言の、照応代名詞による定性の表現について考察を加えた。

ブハラ方言は、他のアラビア語方言と異なり、SOV型の構文をとるが、動詞の後に目的語を受ける接続代名詞の現れることがある。この照応代名詞が、目的語の定性とある程度相関する（すなわち目的語が限定的であれば照応代名詞が出現しやすい）のだが、目的語が限定でなくとも照応代名詞が出現することがある。これには特定のか総称的か、具体的か抽象的か、修飾されているかいないか、など Khan の挙げた定性以外の要因も関与するのである。

《第四章》

テキストの書き出し部分という、状況的・文脈的な情報の欠如した状況で、限定名詞句がどのように用いられているかを通して、その特性を解明した。

- 1) まず、童話というストーリーが単純で主題のはっきりとしたテキストで、その書き出し部分の実例をいくつか検討した結果、読者を物語の世界に引き込むためのテクニックとして初出の事物が限定名詞句で導入されるが、その指示対象は物語全体を通しての舞台やテーマと深く結びついた事物であった。
- 2) 小説でも同様の結果が得られ、現代正則アラビア語における限定形・非限定形の使い分けが、特に物語や小説の書き出し部分において、その指示対象と物語のテーマとの関わりの度合いと深く結びついていることが明らかとなった。
- 3) 他方、事実を正確に伝えるという役目を持つ新聞記事は、文学作品のように、テーマと深い関わりのある事物を書き出し部分において限定形で導入して読者の注意をぐっと引きつける、というテクニックは用いられにくい。そうではなく、読者の持つ既存の知識を土台に、事件についての新情報を順序よく提示していくという手順がとられる。
- 4) ところが見出しでは、本文と違い、文学作品で見られたように、テーマと深い関わりのある事物を書き出し部分において限定形で導入し、読者の注意をぐっと引きつける手法が採られている。また別の形として、見出しで大雑把な情報を与えて、本文でより詳しくそれについて述べるという場合もある。これは口語のトピック-コメント構造にもつながる手法である。
- 5) 話されたテキストにおいては書かれたテキストで用いられたような、テキストの受け手に過重な負担を求めるようなテクニックは用いられ難い。そこで聞き手の持つ旧情報に基づき、物事についての新情報を順々に提示する手順をとり、聞き手に負担のかからない語り出しがされる。
さらにこのように、主題に深い関わりのある人物を限定形で導入するのが難しい話し言葉では、トピック-コメント構造をそれに代えて機能させていることが明らかとなった。
- 6) また話し手が、文化的背景を共有していない外国人に民俗誌を説明するという状況では、説明のテーマとなる事物が限定形で導入される一方、動作主として「私たち」「人々」といった、聞き手に馴染みのある主語の選ばれることがわかった。

《第五章》

アラビア語の限定形名詞句と非限定形名詞句との使い分けについて、正則アラビア語による戯曲中の、実際の用例を通して具体的に分析を加えた。その結果：

- 1) 話し手が誰の立場に立って、つまりどこに視点を置いて話しているかによる違い
- 2) 話し手の対象に対する確信の度合いの表示
- 3) 話し手の対象に対する重要度の付与

という要因の働いていることがわかった。

話し手の態度を話し手が主体的に表明する手だてとして、名詞句の限定形と非限定形とが使い分けられていることを示し、限定・非限定という構造が、テキストの送り手側によって能動的に運用され得る可能性を備えた、主体的な側面を持つ情報構造であることを明らかにした。

また、第四章で扱った、特に書かれたテキストの書き出し部分の限定形の用法が、3)の重要度の付与という要因と深く関連するものであることを指摘した。

《第六章》

限定名詞句の様々な形式の果たす役割を、テキストの展開という観点から考察した。

- 1) まず、聖典クルアーン（コーラン）の物語テキストを分析し、Hinds (1984)の登場人物同定の三段階の破られる例を吟味し、特にトピックとして設定され代名詞で指示されている対象が、固有名詞などで再同定される例から、それが物語の場面や流れの変化、視点の移動などの標識として機能していることを指摘した。また態や相、時制等といった他の文法カテゴリーに関係する形式が、名詞句の形式の変化と連動している場合も少なくなかった。
- 2) 話されたテキストでは、まずひとり語りの場合、トピックとして設定された対象でも代名詞化されるまでに間が必要である。また、代名詞化される前にトピックが移行してしまう例もあった。対話形式の場合は、逆にゼロ照応が多用されていた。対象としたテキストが、インタビュー形式だったので、トピックが質問の形で常に明確にされるためであると考えられる。

また最後に、本論文で扱ったアラビア語の正則語といくつかの方言のうち主なものの特徴をまとめた。

- 1) 正則アラビア語 本論文で正則語の特徴とは、その書き言葉としての特徴となる。書かれたテキストは言語の線状性から解放されている部分があり、情報処理に関して受け手に対し負荷をかけても受け入れられる。そうした特徴から、テキストに初出の対象を限定形で導入するなど、様々なテクニックの用いられる余地ができた。
- 2) エジプト方言 他の方言のように、正則語に比して顕著な差異はないようだ。エジプト方言には、マルタ語に対するイタリア語などのように強力な影響をおよぼす言語が、コプト語からの多少の影響を除けば無いためである。インフォーマントがエジプト人だったのも、正則語とエジプト方言の相違の出なかった原因かも知れない。
- 3) モロッコ方言 限定・非限定という範疇が内在したいくつかの単語が見られた。アラビア語起源でない名詞が殆どで、ある意味で例外的な名詞ではあるが、限定辞を伴わない状態で、限定・非限定双方の意味を表しうるものである。また包含性も持たず、特に卓立的でもない対象に、限定辞が部分冠詞的に用いられる例が多々見られた。
- 4) マルタ語 イタリア語からの影響が語彙面だけでなく、統語論レベルでも見られる。例えば、関係代名詞の用法や関係節の構造、限定形の普通名詞を形容詞で修飾する場合の限定辞の用法、名詞句の null article という状態の存在など、正則語や他のアラビア語方言とは異なる特徴が見られた。

- 5) プハラ方言 トルコ語やイラン諸語の影響で、限定辞をほぼ喪失している。限定辞が用いられるのは、形骸的な慣用句内での用例などにとどまる。さらに、無標的な語順としてSOV構文が専ら用いられる。また動詞の後に、目的語に対する照応代名詞として、接続代名詞が添えられることがあるが、これはその目的語の個別性・卓立性と大きく関わるものである。

最後に、結語で各章で明らかにしてきた限定・非限定に関する諸事項をまとめた。

また末尾に《付録》として、限定・非限定を表す言語形式についての Krámský の分類と、アラビア語の限定名詞句に関連する図表・説明を載せた。

3 今後の課題

- 1) さらに多くのテキストを分析の対象とすること。

文字でないテキスト、話された生の資料の収集、そのためにもフィールド調査は不可欠である。

また収集したテキストを分析するため、方言の習得そのものにも力を入れる必要がある。

- 2) アラビア語に影響を及ぼしている周辺言語に関する検討を行うこと。

- 3) 名詞句全般（限定辞を伴った名詞句以外の限定名詞句や、所有表現など）にわたって考察すること。

- 4) 限定・非限定と他の文法事項との関連についても明らかにすること。

この4点が、今後の課題である。